蓬莱町だより

第十号
昭和60年3月25日
発行者　蓬莱町会
編集者　文化部

蓬莱町界隈（その七）

旧制郁文館中学（Ⅲ）

林　順信

◇想い出の名物先生

戦災で焼けるまでの郁文館の校舎は、薄い水色のペンキを塗った木造二階建てで、外壁は南京下見張りの瓦葺きであった。こういう建て方の校舎は、戦前までは、全国いたる所で見られた至極当り前のものであったが、今や、こういう建物はめったにお目にかかれず、あれば西洋館として珍重される御時勢となった。郁文館の塀は、トタン板を連ねたもので、それに三寸巾の杉板を打ちつけて塀とし、上には、矢張り三寸巾の荒い杉板を、屋根の様にのせてあった。蓬莱町の道路、今で言うなら、正門のカギの手に曲っているあたりの塀に登って、我々悪童どもは、教室の授業風景を見ていたことがよくあった。

英語の時間には、「ズィス　イズ　ア　ペン」だとか「イズ　ザット　ア　ブック？」などと、先生のあとに続いて合唱している光景が春の新学期にはあったし、そのあたりは商業科の教室だったのだろう、「願いましては三十銭なり、二十銭なり、四十ごん（五）銭では…？」なんて、先生が読み上げると、各自が机の上で算盤をパチパチはじいている姿を眺めてたものだ。中には、塀の上の我々に気をとられて他所見をして、先生の質問に答えられず欧られる生徒もいて可愛そうだったが、先徒も塀から下りろなどと言う者は一人もいなかった。

門前の小僧なみの我々には、郁文館の先生の中で、特徴のある名物先生のアダ名だけは意外と早く、どこからともなくとび込んで来たので今でも覚えている。

校長の棚橋勝太郎先生は、当時は白面の貴公子然とした若者で、御宅は丸山新町にあったから、誠之から郁文館をへて慶応義塾に学ばれ、父君棚橋一郎先生の跡を継がれて学校に奉じられた。ふさふさとした頭髪を中央で分け、それがまるで馬のたて髪の様に見え、そして顔が長く、目の大きさも形も手伝って、お馬に似ていることから、「お馬ヒンヒン」とニックネームを贈られていた。

数学の鳥居良一郎先生は、風貌が日本人ばなれして、入り目でおでこが広く、ナポレオンの肖像そっくりなので「ナポレオン」と命名されていた。明治十年生まれ、私の伯父と誠之小学校での同級生で、京華中学から一高を卒業されたが、故あって帝大には行かず、郁文館で数学を教えて居られた。一見外人教師を思わせる先生のことは、我々門前の小僧どもで知らない者はなかった。授業中、いたづらをしている生徒には、「これこれ　その子」といって、鼻の穴に突っ込んである、堅く丸めた鼻紙を投げつけるので有名だった。鳥居先生は九十何才という天寿をまっとうされて、数年前に他界されたと聞く。郁文館の九十八年の歴史の中で、鳥居先生の薫陶を受けた卒業生は数え切れない。

同じく数学の先生だったと思うが、「ハブ」とあだ名された先生がいた。昼休みとなると、学校から出て、蓬莱町の旧電車通りのお店で昼飯を食べて、帰りには、楊子を口にくわえたまま、右手を常にチョッキのポケットに入れて、外肢で歩いて来る。いかにもこわそうな先生で、両方のエラが発達しているのと、恐らくおっかない先生だったので、「ハブ」と言われていた。なんでも、京北中学から郁文館に転じたといわれていたが、本名を覚えていないのは申し訳ない次第である。

また、こんな先生もいた。いかにも東洋の先哲を思わせる風采で、蓬髪に昔風の眼鏡をかけ、細くて長い口髭を生やしていて、細い目といい、顔の感じといい、電気ナマズを思わせるので「電ナマ」といわれていたのが、国語・漢文の

佐藤惣右衛門先生だった。その学力のほどは底知れぬといった感じで、旧制中学の先生をさせて置くのは勿体ないと噂されていた先生で、名物中の名物先生であった。私はこの先生のアダ名しか知らなかったので、戦時中、郁文館を卒業した推理作家の梶龍雄さんに、本名を教えてもらった次第である。

郁文館の先生方の中での巨漢といえば、英語の大谷寛一先生だったろう。栃木県は大谷石の名産地の宇都宮の出身で、宇中から早稲田大学の英文科を出られ、若くして郁文館に身に投じた熱血漢だった。大のあつがりで、いつも大汗をかいて、ゆでだこの様な顔や頭から湯気がぼろぼろ出ているところから、「大やかん」と呼ばれていた。先生の本名大谷寛一の発音からも、このアダ名がぴったりだった。

この大谷先生と、前の佐藤先生のおふたりは、戦時中、日立製作所の亀有工場に、勤労動員で働らいていた郁文館中学の担任として、工場の勤労課で監督の任に当たられていた。この時、私のいた京華中学も、同じく日立の亀有工場に動員されていたので、この両先生には、殊のほか親しみを覚えていたのである。

戦時中の、郁文館や京華の話は、機会があれば、後日、書き残したいと思っている。

◇郁文館の自動車部

現在の郁文館の校庭は、一面にカラフルなアンツーカーなどが敷きつけられているが、以前は、泥と云うか土の運動場だった。東京の市内の小学校の運動場は、震災後の復興小学校というのがあって、ほとんどがコンクリートの運動場がほとんどであったから、土の運動場というのは、蓬莱町の子供たちにとっては貴重な空間であった。晴れていれば、駈けっこをしたり、とんぼをとったり、凧をあげたりが出来たし、雨が降れば、そこに出来る大きな水たまりに集まった、ゲンゴロウやミズスマシをつかまえて遊ぶこともできた。

郁文館中学や商業の授業が終わる午後三時頃からは、校庭で、自動車の運転練習がよく行われていた。校庭の東南の隅の方には、学校の教練で使う、三八式の歩兵銃を収納してある木造倉庫つまり、兵器庫が南にかけて幾棟か並んでいたが、その左手に、おんぼろな自動車の車庫があった。杉板を斜めに打ちつけた大きな扉が二枚あって、それが太い角柱のかんぬきでしまっていた。まるで、スペインの闘牛の牛が場内に出て来る時の様な扉がついていて、中におんぼろ自動車が二台格納されてあった。恐らく一九二八年型くらいの、フォードとシボレーだったと思うが、それは郁文館の自動車部の車であった。今考えると、昭和十一、二年頃、旧制中学校や商業学校で、自動車部というのがあって、校庭で運転練習をやっていたということが、なかなか時代の先端を行っている様で、よい試みではなかったかと思うのである。おんぼろ自動車が、白紫色の煙を吐いて、校庭をのろのろのたうち廻っていたのだからおもしろかった。時速は二十キロにも満たないのろのろ運転だったから、我々悪童どもは、その間げきをぬって駈け出して遊んでいられたから、いかにものんびりとしていた。思うに、当時は、昭和初期に日本を襲った大恐慌のあおりで就職難が続き、東京市内の円タクの運転手に、数多くの学校出の運転手が生まれた時代だった。当時、五か年制の旧制中学や商業の最上級生は、数え年で十九才になったから、きっと自動車の免状はとれたのだろう。商業科の卒業生は自動車の運転くらい出来た方が有利だという時代が、日本にも来ていたのだろう。

郁文館の自動車部の先生は、まるで「のんきな父さん」みたいな、丸いハゲ頭に毛が二、三本、度のきつい鼻眼鏡をかけた、古川緑波に似た顔付で、ぐずぐずのおんぼろズボンに、車の修理でよごれた丸首シャツを着ていた横山丈夫先生だった。この横山先生、噂によると水泳の方は丸っきりということから、その風貌もあって、「陸上カバ」という称号を贈られていた。生徒たちは、校庭に一列に並んで、順ぐりに自動車の運転を教わっていたが、車の運転のほかに、車の構造や修理のことも、物理担任のこの

先生から教えられていた。

この昭和十年頃は、本郷の中でも、土地が四十坪程の住宅を建てるのに、ざっと千円も出せば一戸建ては出来た時代で、この時、米国のフォードやシボレーは大衆車として、よくタクシーに使われていた。その新車一台が約千五百円、タクシーの運転手の一か月の収入が、官庁の課長なみの百円だった。大学出の初任給が四十五円の時代だから、タクシーの運転手はモテた時代だ。因みに、カメラのライカが五百円もしたのだから、今昔の感に堪えない。市内一円というが、本郷から上野なら三十銭、一円は本郷から銀座とか両国とかの相当に遠い距離の場合で、現在の様にメーター制でないから、運転手と一々きめてから乗った。当時は運転手は皮のジャンバーにソフトなんかをかぶって威張っていたが、その隣りに坐って、方向指定をしたり、客拾いをして、とっくりのセーターなんか着ていた助手が苦労をさせられた。助手は車の掃除から、車庫の出し入れまで、すべて、運転手の下働きをしながら、車の運転を覚えた。親方のところに居候して、風呂賃を節約して小銭を貯めては、免許証の試験を受け、七度も八度も落っこちて、やっと合格して運転手になった。だから運転手はいばっていた。運転手は、月々百円のかせぎの中から、少しずつ貯金して、親方から少し賃金を貸りて、新車を買い、月賦で返して、やっと二、三年で自分の車を一台持てる時代だった。現在、都内の個人タクシーの長老格の殆んどは、そういう苦労を重ねて一人前になった人たちだ。

閑話休題、昭和十二年七月、日中戦争が勃発し、次第に燃料不足に見舞われ、ガソリンの配給時代を迎えて、郁文館の自動車部も、止むなく活動停止となったと記憶している。

町会活動の概要

昭和59年11月から60年2月まで（4か月間）

総務部

12月18日　「年末年始の当町会地域ごみ収集日について」お知らせを配布

12月19日　「文京区役所と区民との対話集会」区民センター於て

12月25日　門松（絵ビラ）町会より各会員宅へ配布

1月5日　区内全町会長新年名刺交換、文京区役所主催　区民センター於て

1月25日　地下鉄新線工事に関する説明会

2月6日　「区政を話し合う集い」向丘出張所於て

当町会の要望いたしましたことは、次のとおりです。

一、防災用具並びに備品の収納庫・設置場所の確保について

一、ごみ収集日以外の日のごみ持出し禁止の啓蒙策について

（かかる行為を防止するための注意文（看板）の作成）

一、町会掲示板（現在、町会費で作成している）の作成に伴う経費の区側一部補助について

防火部

11月11日　本郷・小石川両消防団による合同消防訓練に町会から部長が出席

11月23日　「昭和59年度防災訓練コンクール」文京区役所　共催　本郷消防署　文京第六中学校校庭に於て　午前9時～12時まで

このたびの訓練についても、回覧によりまして、町内皆様のご参加をお願いいたしましたが、当日が祭日のこともあって、少数の方のご参加しか得られませんでした。

いざと言うときに役立つ、初期消火を習得するよい機会と思います。次回にはぜひ皆様のご参加をお願いいたします。

11月26日～12月2日の間

当町会役員が立合いまして、各町会

員宅の防火診断が本郷消防署員により実施されました。

防犯部

11月29日　防犯対策会議　駒込警察署に於て
1月31日　駒込防犯協会、本年初会合を開催

婦人部

11月13日　このたび本郷防火協会では、協会の組織として婦人防火部を設置、当町会婦人部では、橋口フサ子様を部員に推せん、本日、婦人防火部の初会議に出席しました。

12月12日　エチオピア難民救災支援運動として、毛布の提供をお願いいたしましたところ、多数の皆様のご賛同を賜り有難うございました。

12月13日　本年の「歳末助け合い募金」も町内皆様のご厚志を得て、右の金円を協会に納めましたので報告いたします。

一金　拾六萬九千七六円也

文化部

町会員のご家庭で本年成人を迎えられた方は、左記にお名前をのせさせて頂きました。誠におめでとうございます。当町会から新成人となられた方々に心ばかりの祝品をお贈りいたしました。

記

金子　佳子　　金子　義則　　室川　和也
半沢　規子　　村野　精一　　小幡　幸生
平林真理子　　川村　朋子　　北沢公一郎
小池　真一　　加藤　緑夏　　武藤　和子
青樹　園子　　菅野　好美　　水谷　貴充
海老原史恵　　清水　直人　　藍原　裕子
島田　智子　　（順不同）

交通部

1月31日　駒込交通安全協会　本年初会議開催

青年部

12月18日から29日まで（12日間）
歳末期町内巡回夜警実施

幸いにして、当町内では火災・盗難などの被害は一件もなく、新らたな年を迎えましたこと、ご同慶にたえません。

これも一重に町内皆様のご協力のたまものと感謝いたします。今後共、町内の治安にご尽力下さる様お願い申し上げます。

「故　辻英雄氏に　おくる」

高島　正義

辻英雄さん、本当に永い間ご苦労様でした。蓬莱町会が、旧蓬莱町域を併せて名実共に町会としての型をととのえたのは、今から六十四年前の大正十年のことです。創立当時、私の父が会計を担当し、あなたも若漢二十才ながら役員として町務に参加されました。

一口に六十年といいますが、この間の世状は、大正の大震災あり、第二次大戦があり、戦災があり、戦後の社会混乱がありました。戦中は首都防衛に、戦後は配給物資の配付に、町会の役員はいくら尽しても報われる事の少い仕事に自からの体と時間を費してがんばって来ました。ふり返って見ましたら、あなたは正に蓬莱町会のためにその一生の貴重な時間の大部分を尽して来られたのです。近頃でこそ各町会で盛んになった、老人のための集りも、わが町会にあなたが中心となって「蓬莱友の会」が出来たのはもう二十年も前からの事です。

「不言実行」名利を求めず、他のために尽したあなたの後姿は、識る人ぞ識る、尊い教えでした。

一昨年、昭和五十八年十一月に、あなたが受けた「黄綬褒章」は、おくらばせながら、あな

たのたゆまざる人生の歩みを国が認めたあかしです。「そんな事はどうでもいい」「おれはおれの生き方で生きて来たのだから」ふっとこんな言葉が、あなたの口からもれた様な気がします。

一個の市井の人間としても、あなたは自からを修めるために、数々の努力をして来られました。特に仏教の信者として、仏の教えを、われわれ凡人にも理解できるように、平明な言葉とし、また時には自らガリ版を刷って数頁の冊子を作り知友に配付されたこともあります。それ等の知識をあなたが、何時、どこで学ばれたのかは知りません。聞くところによれば、あなたが帰依されておる、浄土真宗（門徒）の教儀の中には、在家の中でも特別信心堅固の者に、連如上人直々に、全知識をお授けなされたという法縁があるとの事です。めぐりめぐって、辻英雄さんは、その法縁につながる稀有な方だったと思います。

ある時、あなたが私に『自分は絶対に死なない、必ず極楽に住生するのだから、悲しむことはない』と確固とした信念で云われた事を今、思い出しています。しかし、私はまだ凡愚の身です。つい数年前まで町会の仕事に私を滅して奉仕されておられたあなたを目前に見る事の出来ない淋びしさに、涙を止めることが出来ません。辻さん。極楽からどうか私たちを見守って下さい。合掌。

60・2・20記（町会副会長）

蓬莱町古寺巡礼　その二

真浄寺（真宗大谷派）

この寺は、檀家の先祖の過半数が北陸、とくに加賀の出身者という寺である。慶長十八年（一六一三）に新天地を求めて江戸に出て来た北陸の人々によって神田連雀町に創られ、住職にはかって石山合戦の頃、本願寺で直参衆をしていた「教念」の孫「宗閑」が迎えられた。当時寺域が一万坪余あったと記されているが、おそらく当時江戸に出て来た北陸出身者の部落全体の広さであり、寺そのものは部落内の一家屋を仏法聴聞に都合よいように改造した程度のものだったと思われる。

慶安元年（一六四八）幕府に移転を命ぜられ、一時、本郷金助町に移ったが火災で類焼、以後移る先々で災難にあいつゝ宝暦十一年、現在地に移った。

この寺には、東洋大学の前身である、哲学館（現在の郁文館学園の場処に創始された）の井上円了に師事した「高嶋米峰」の墓があり、米峰は後に（昭和十八年）東洋大学の学長となり、亦、幸徳秋水の遺著「基督抹殺論」を友情出版した事でも注目をあびた。若くして、新仏教同志会を組織し以後、終生、禁酒、禁煙を貫いた人である。

また、明治の画人、川上冬崖に師事し、洋画じゅく「不同会」を創立し、ながく高等師範の絵画教育に従事して、多くの子弟を育てた。近代日本の先覚的な洋画人「小山正太郎」の墓もあります。さらに、戦前戦中の学生にとっていかめしくもなつかしい「桑木厳翼」先生もこの寺に眠っておられる。東大文学部哲学科を卒業した桑木厳翼は、渡欧留学後、京都大学、東京大学の哲学の教授として当時の哲学界をリードし、昭和二十一年には、貴族院議員に学識会員として推され、自由党総務に任じられた。

最近一万円札の顔となった、福沢諭吉と、この寺の当時の住職　石亀福寿（明治十五年頃寺田と改姓、明治十六年真浄寺住職）の間柄は余り世に知られていない事実であるが、明治十九年五月八日に、福沢諭吉が自分の母お順の十三回忌の法要の供養のために石亀福寿に読経を頼んだ事が「福沢諭吉全集」に書簡として集録されている。福沢諭吉と石亀福寿との出合が何時の事か正確に記録されていないが、福沢の明治十年前後の交友録の中に石亀福寿（浄土真宗僧侶）の名があり、その上に「那珂通世の知人」とある。那珂通世は、慶応義塾の出身で千葉師

範学校の校長を経て後に「女子師範東京高等師範等に奉職した人で、日・鮮・中の古史を研究し日本紀元の誤りを指摘した歴史家である。

蓬莱句壇

正月　於海蔵寺60・1・17

天　これからは誰ればばからぬ奴凧　松男
地　初伊勢や神鶏闇にひびきけり　笑子
人　年玉や兄から順に渡しけり　禎一
人　妻病みて鉛の粉の冬霞　蓼雨
　千文字に明治の気慨筆始め　喜一
　破魔矢には凛々しき童子絵馬揺れて　スエ
　山茶花落つ老妓のごとく淡かりし　ひろし
　墨東に江戸を尋めゆけりなづな篭　連木

二月　於海蔵寺60・2・18

天　扇屋の門の辺くらし一の午　京子
地　献血車北風の中取り残す　喜一
人　煮凝や生活そのまゝ夫婦箸　喜一
　やわらかき光の渦や春隣　笑子
　願ひごと吉みくじなり寒牡丹　スエ
　着ぶくれて老母の背いよよまるうして　禎一
　海苔載れば香の誘ひおり客二人　真幸
　根っからの下町育ち寒の木瓜　帰蘖
　白魚のつるりとぬけしのどぼとけ　連木

訃報

当町会にお住いの方で、11月から本年の2月までの間にご逝去された方々のご氏名は左記のとおりでございます。
謹んで弔意を申し上げ御冥福をお祈りいたします。

記

寺田千里様　小林トキ様　辻　英雄様

編集部

今年の陽気は昨年のような大雪の心配もなく、温暖な日々が続き春近しの感がいたします。
それでも東京の雪は三月に入ってから多いとか、お彼岸の声を聞くまでは、まだ厳しい寒さもあることでしょう。
どうぞ皆様、お元気でお過し下さい。
町会に対するご意見等がございましたら編集部あてお寄せ下さい。

蓬莱町だよりも今回で第十号となりました。巻頭に、林順信先生のご好意で楽しい昔ばなしを書きつづけていたゞいておりますが、先生は今『国鉄汽車の旅』を執筆中です。特にローカル線の旅に興味を持たれて、全国津々浦々を資料採取の為に歩かれておられると聞きました。そのご多忙な中で、蓬莱町の為に原稿をお書き下さっているわけです。近い将来先生の「汽車の旅」が出版されると思いますのでその時はご一読下さい。当だよりでもご案内したいと考えています。

蓬莱町会のためにその一生のほとんどを尽くされた辻英雄氏が亡くなられました。ご高齢とは云え誠に残念な事です。その辻さんと共に町務にたづさわって来られた、現町会副会長の高島さんに追悼の一文をいただきました。

編集委員
小林音吉　竹中一馬　猪熊良晃
高橋一郎　翁　松夫　池田　暉

※次号の発行は6月を予定しております。